

平成22年度 保健室経営の重点活動表

【教育目標】

自ら学び 共に高め合って やり抜く生徒

中学校

(生徒数184名)

【生徒の健康課題】

H21年度う歯処置歯率62.4%（県平均74.6%）と低く、治療勧告書をもらっても治療に行かない生徒は、はみがきの習慣が定着していないため新たなう歯を作る生徒が多い。

【重点目標】

- ・ 学力向上をめざし、主体的に学習に取り組む生徒の育成
- ・ 豊かな心を持ち、集団としての高まりをめざす生徒の育成
- ・ 体力の向上と健康増進に取り組む生徒の育成

【養護教諭の生徒への願い】

歯の大切さについて理解を深め、はみがきの習慣を定着させたい。治療が必要な場合、早期治療を実行させたい。

【組織的に健康教育を推進する具体的な方策と評価】

	評価項目	評価基準・評価方法	中間達成状況と今後の方策(9月30日)	年度末の達成状況と次年度の方策(1月13日)
成果	生徒及び保護者が歯科疾患の早期治療について理解を深め、治療率が向上する。	治療勧告書の回収率が、 A：65%以上 B：64～46% C：45%未満	B 治療勧告書回収率(9/30現在)：54.8% クラスごとの受診率を毎月の保健計画に掲載したり、掲示物として廊下に貼ったりした。	A 治療勧告書回収率(1/13現在)：66.1% 今まで歯科に積極的に受診しなかった生徒も、生徒の実情や早期受診へ理解を示し、受診を積極的に行った。
教育活動	治療が未実施者への個別指導及び再治療勧告の実施(夏休み前、冬休み前)	A：該当生徒に実施した B：該当生徒の1/3以上 C：該当生徒の1/3以下	A 未受診者に対し、夏休み前に再治療勧告を配付した。合わせて、未受診者の一覧を学級担任に配付し、家庭訪問時に保護者へ働きかけてもらった。夏休み明けには、未受診者に対し、個別指導を行い、早期治療を促した。	A 歯科未受診者に対し、追加の治療勧告を計画どおり2回実施できた。また、廊下の生徒がよく見る掲示板に各クラスごとの未受診者数を毎月掲示し、早期受診の意識付けを図った。
運営活動	歯科疾患の早期治療の必要性や治療状況を生徒や保護者に周知する。(ほげんだより)	ほげんだよりに歯科疾患の早期治療について記載が A：年5回以上 B：年3、4回。 C：2回未満	未評価 9月末までのほげんだよりの歯科保健についての掲載は4回。6月に行われた地域懇談会には資料を作成し、学校の重点課題として歯科保健に取り組んでいる現状を説明し、協力を求めた。	A 1月までのほげんだよりの歯科保健についての掲載は6回。定期的に歯科受診状況を掲載したり、12月のほげんだよりでは学校保健委員会での話し合い内容を掲載したりして、年間を通して保護者へ協力を求めることができた。
	う歯処置率向上をテーマにした学校保健委員会の開催	う歯処置率向上についての協議が活発に行われたと回答した割合が(学校保健委員会参加者への事後アンケート) A：70%以上 B：60%以上～70%未満 C：60%未満	未評価(11/26実施予定) 当日、全校歯科保健指導をしてくださる歯科衛生士や学校保健委員会に参加する保護者・生徒・職員に、学校の実態・問題点・願いを伝えていく。また、学校保健委員会後の生徒の変容等についても、保護者に伝えていく。	A 事後アンケートの結果、肯定的評価が100.0%(協議が積極的に行われた62.5%、まあまあ積極的に行われた37.5%)となった。協議前に生徒に事前指導をし、協議のねらい等を理解させたことが、有効だったと思われる。また、同日に行われた歯科衛生士による全校歯科指導も学校側の要望が反映され、参加者の歯科保健に対する意識の向上に有効だった。

<考察>

健康教育活動がより活性化し、成果として生徒に反映されるために、県養護教員研究協議会小中学校部のH21年度研究実践状況調査から組織的な活動を活性化するための要因(参考1)から、自校の取組を振り返ってみた。その結果、課題の重要性についての共通理解、教職員との情報交換の時間確保、問題を組織的に解決する体制、保護者との連携について、当校において特に改善が必要と考えた。

○ 課題の重要性についての共通理解、教職員との情報交換の時間確保

職員間で課題の重要性について共通理解のもと取組めるように、検診前や全校で話す機会などに当校の実情や健康課題についてわずかな時間でも周知するように心がけ、また、毎月の保健計画や掲示物でも職員への働きかけを行った。

特に、毎月の保健計画では、学級ごとの治療報告書の回収率を載せ、定期的に呼びかけを行った。このことにより、学級担任の健康課題に対する理解が得られ、学級だよりに治療報告書の回収率を載せてくれたり、早期受診を生徒や保護者に直接働きかけてくれたりした職員もいた。健康課題について、職員全体や部会で話し合う時間の確保がほとんどできないため、このように短時間で職員に学校の健康課題について働きかけていく方法も必要と考える。

○ 問題を組織的に解決する体制

問題を組織的に解決するため、2年間を通して特に学校保健委員会の場を活用して働きかけを行った。

今まで、PTAの一部と数名の職員の参加のみだった学校保健委員会の構成メンバーを見直し、管理職及び健康教育部の担当職員全員へと増やした。各学年・生徒会の代表生徒も参加させ、職員・保護者・生徒それぞれの立場から話し合いが行われるようにした。また、学校保健委員会で話し合われた内容をその場限りで終わらせないために、生徒には学級や委員会に内容を持ち帰らせ全校生徒に内容が伝達されるように工夫した。当日参加できなかった保護者にはほけんだよりを通じ、当日の様子を知らせ、協力を求めた。

○ 保護者との連携

歯科への早期受診には保護者の協力が不可欠のため、ほけんだよりで早期受診の必要性や協力の依頼について、多く掲載するようにした。また、ほけんだよりだけでなく、地域懇談会や個別面談など一つの媒体にこだわらず、保護者に働きかけていくことができた。

参考1：組織的活動を活性化するための要因

(中学校 200人以下) ~H21年度研究実践状況結果より~

課題の重要性についての共通理解	***
教職員との情報交換の時間確保	***
管理職の教育方針と実践内容の一致	*
職場の人間関係	***
健康問題を養護教諭だけに任せていない	**
問題を組織的に解決する体制	***
外部専門機関との連携	
保護者との連携	***
コーディネーター業務の時間確保	
養護教諭からの働きかけ	***
養護教諭自身の意欲	*

有意差 5%(*) 1%(**) 0.1%(***)

資料1：ほけんだより（学校保健委員会活動紹介）

中学生の歯がよくなるために、みんなで意見交換しました～学校保健給食委員会～

先月26日(金)に学校保健給食委員会が開催されました。白井歯科先生を始め、相澤歯科衛生士さん、PTA 保健教員部の方や、各学級や委員会の代表生徒にも参加してもらい、当校の課題である『う歯治療率向上のための取組』について話し合いました。

当日の5時間目は、元気館の相澤歯科衛生士さんから、全校歯科指導を実施していただきました。歯液を摂取し、むし歯のなりやすさについて検査するFIDテストや、むし歯や歯肉病の口のイメージが外観にどのように影響するか「歯」のメンバーの写真を用いて、分かりやすく説明していただきました。

FIDテストとは…
唾液を1滴垂らし、15分程度、体温で培養することにより、口腔内の衛生状態が分かります。15分後、青色なら口腔内にほとんどむし歯菌はいないけれど、ピンクだとむし歯菌が多いこととなります。

●●●う歯(むし歯)治療率向上のために、自分たちができることを話し合いました●●●

<生徒から>

- ・ はみがき調べ以外の日に、歯をみがかない人がいる。はみがき調べを抜き打ちにしたらどうか？
- ・ はみがきをしていても、ハブラシをくわえたままの人や、時間が短い人がいる。
- ・ はみがきをしないで、体育館に遊びに行く人がいる。はみがきの時間を固定したらどうか？
- ・ 歯とスポーツの関係について学ぶと、もっと意欲が高まるのでは？

<保護者の方から>

- ・ 今回の歯科指導を聞いて、歯科を予約しなればと思った。
- ・ 子どもが中学生になると、小学生の頃より、声掛けをしなくなった。
- ・ 家庭により、ハミガキの習慣に差があるのでは？子どもにハミガキの声掛けをしてほしい。

<白井歯科先生、相澤歯科衛生士さんから>

- ・ 中学生のうちから、正しい歯の知識を与え、重要性を教えていくことが必要。
- ・ 歯の大切さは、大人にならないと実感できない。親から子へ、歯の大切さについて語る機会をぜひ持って欲しい。

当日出された多くの意見を参考にさせていただきますながら、学校でも歯科保健の工夫と改善を図っていきたく思います。ご理解・ご協力をお願いします。

平成22年度 保健室経営の重点活動表

中学校
(生徒数 383人)

【教育目標】 目標をもち 自ら考え ねばり強く実践する生徒

【重点目標】
信頼しあえる人間関係を築くことができる生徒

【養護教諭の児童・生徒への願い】
・知識を行動にうつせる人になってほしい。

【児童・生徒の健康課題】
・人間関係構築力が弱い
(ことば・表現力・想像力が不十分)

【組織的に健康教育を推進する具体的な方策と評価】

	評価項目	評価基準・評価方法	中間達成状況と今後の方策	年度末の達成状況と次年度の方策
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・90%以上の生徒が自分のクラスはいここちが いいと思う。 ・教室への不適応生徒を1%未満にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒へのアンケートから A：90%以上 B：80～89% C：80%未満 ・年度末の生徒の様子から A：1%未満 B：1%以上 	<p>A：7月の生徒へのアンケート 結果は90%であった。 1年87%、2年86%、3年96% %</p> <p>A：前期末では、1年生0人、3年生 1人、2年生2名の3名である。</p>	<p>B：12月の生徒へのアンケート結果は 89%であった。 1年87%、2年79%、3年97% 2年生が7%落ち込んだ。</p> <p>B：2月末現在、1年生1名、2年生2名、 3年生2名の5名であり、1%以上である。</p>
教育活動	<ul style="list-style-type: none"> ・温かい人間関係を確立し、相手のことを思い やれる保健学習を行う。 ・相談を受けた場合、丁寧に聞き取り、問題を 明確にした上で、解決方法を一緒に考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保健学習後、学習したことと自分とを照ら し合わせた振り返りができる生徒の割合 (ワークシートより) A：80%以上 B：70～79% C：70%未満 ・生徒のその後の行動から考えたことを実行 行にうつした割合 A：90%以上 B：80～89% C：80%未満 	<p>3年 12月 2年 2月 1年 1月 実施予定。</p> <p>A：相談を受けた生徒へのその 後の聞き取りにより行動にうつ した生徒の割合は91.0%</p>	<p>A：学習したことと自分とを照らし合わせた 振り返りができた生徒は 3年生 89.2%、2年生 78.6% 1年生 93.5%</p> <p>A：相談を受けた生徒へのその後の聞き取り により行動にうつした生徒の割合は93. 7%</p>

運営活動	<ul style="list-style-type: none"> ・他の職員と連携し、保健室からの情報を生徒理解に役立てる。 ・本校で活用できる地或相談支援関係機関一覧表を見直し、より使いやすいものにする。 ・昨年度の反省をもとに、保健学習実施時は、連携する保健体育科の教師や外部講師と打ち合わせを十分に行った上で実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員へのアンケートより役だったと回答した職員 A：90%以上 B：80%以上 C：80%未満 ・A：見直した。 ・打ち合わせ時間の確保 A：3学年確保できた B：2学年確保できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 職員のアンケートは年度末に実施予定。 A：職員の相談機関を加えた。 打ち合わせは授業の1ヶ月前に実施する予定。 	<ul style="list-style-type: none"> A：91.0%の職員が保健室からの情報が役立ったと回答した。 B：保健体育科教師と保健所の保健師とは十分打ち合わせの時間をとることができ、互いに伝えたいことを理解した上で、実施できた。
------	---	---	--	---

【考察】

自分のクラスのいごちについては、2年生の割合が後期では前期と比較して7%落ち込んでいる。実数にして、25名がいごちがよいとは思っていない。このことは後期になり、人間関係のトラブルが男女ともにおこったことが一因だと考えられる。このトラブルを解決していく過程でも、なかなか行動選択できない生徒がいた。保健室では、粘り強く、話を聴き、その時々苦戦していることを明確に、行動を選択できるように努めた。

人間関係や学習面での苦戦から教室への不適応を起こした生徒は継続を含め、2月末5名である。5名とも、全く登校できない状態ではなくなったので、（3年生2名は、卒業式には出席予定。2年生2名は、修学旅行に参加予定。1年生についても1時間登校から、給食摂取後、自力で下校する状態にある。）今後も関係する職員と連携し、役割を明確にして支えていきたい。

また、今年度は「望ましい人間関係」ではなく「信頼しあえる人間関係」を築く生徒をめざすため、生徒と教師、生徒同士、教師同士が信頼しあえる関係をつくることを常に視点において活動してきた。職員の大幅な異動と若手職員の増加から、他の職員と連携を図るうえでも、「信頼しあえる」関係づくりを行うことを基盤に、生徒が抱えた問題の解決にあたった。

生徒への対応としては、昨年の反省をふまえ、保健室来室時に行う個別の対応と集団に行う保健学習の2つの柱で、それぞれがリンクするように行った。特に、保健学習では、互いに考えを伝え合う、聴き合う活動を意図的に設定し、認め合いながら、他者とかかわることをめざした。その評価の一つとして、授業の終末に必ず、振り返る活動を行い、次の活動への意欲づけを行った。

実際、心の成長を評価することは、難しいことであるが、客観的に評価していくことが次の手立てを考える上で、必要である。今後も評価しにくさを克服すること。コーディネート業務を意識して、「信頼しあえる」人間関係づくりを行うことに努めていきたい。

平成22年度 保健室経営の重点活動表

中学校
(生徒数 311名)

【児童・生徒の健康課題】
 ・睡眠不足や疲労で体調を崩す生徒がいる。
 ・メディアコントロール力が不足している。
 ・視力低下者と肥満傾向者が多い。
 ・不登校や不適応傾向の生徒がいる。
 ・生徒間のトラブルや、ケガが多い。

【教育目標】
 豊かな心を持ち、たくましく実践する生徒

【重点目標】
 自分の生活習慣を振り返り、主体的に生活改善に取り組む生徒

【養護教諭の生徒への願い】
 自分の健康課題を見つけ、主体的に生活改善に取り組み、自他の生命を大切にする生徒

【組織的に健康教育を推進する具体的な方策と評価】

	評価項目	評価基準・評価方法	中間達成状況と今後の方策	年度末の達成状況と次年度の方策
成果	●自分の生活を改善し、早寝・早起きなどの規則正しい生活をさせる。	学校評価の「早寝・早起きができた」と評価した生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：70%未満	B：前期の学校評価の「早寝・早起きができた」と評価した生徒は、74%であった。11月の健康生活チャレンジ習慣で、生徒の意識をさらに高める。	B：後期の学校評価の「早寝・早起きができた」と評価した生徒は、78%であった。意識は高まっても、行動化につながらない生徒の分析が必要である。
教育活動	●自分の生活習慣を記録して実態をつかませ、メディアを上手にコントロールするなどして、早寝・早起きできるように生活改善させる。	健康生活チャレンジ週間を実施し、チャレンジカードを記入させる。カードの自己評価で「生活習慣を改善できた」と「まあまあ生活改善できた」と答える生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：70%未満	11月22日から健康生活チャレンジ週間が始まる。今年度は、学習指導部と連携して、生活習慣を改善して、学習時間も増やす方向で行う。カードの提出率を100%とするため、カードの記入は、学校で朝学活や終学活で一斉に行う。	A：「生活習慣を改善できた」と「まあまあ生活改善できた」答えた生徒は、87%であった。 学習指導部との連携と保健委員会生徒からの働きかけにも効果があった。カードの保護者記入欄で保護者の意識も高まった。
運営活動	●学校保健委員会で、生活習慣アンケートの結果から課題を提起し、対策を考えさせる。 保健師など地域の専門家から指導をいただき、地域、保護者、学校の連携を強める。 ●2年生は、血液検査をする前に生活習慣病予防教室を開催する。 地域の保健師を講師に迎え、生活習慣の大切さと血液検査の結果と生活習慣の関連について理解させる。 ●血液検査受診者には、栄養士や保健師を講師にして、親子一緒に結果を受けての生活習慣の指導を受けさせ、親子両方の生活改善への意識を高める。	学校保健委員会に参加した生徒と保護者の感想文で、「生活改善や今後の広報活動への意思や意欲について」記述した人が A：80%以上 B：70%以上 C：70%未満 血液検査受診率を昨年度と比較して評価する。 生活習慣病予防教室終了後の生徒の感想文で、「生活改善への意思や意欲について」記述した人が A：80%以上 B：70%以上 C：70%未満 生活習慣の指導を受けた保護者のアンケートで、「生活習慣の個別指導を受けて良かった」と答えた人が A：80%以上 B：70%以上 C：70%未満	B：学校保健委員会に参加した生徒と保護者の感想文で「生活改善や今後の広報活動への意思や意欲について」記述した人が、74%であった。(生徒：81%、保護者58%) A：昨年度の血液検査の受診率は72%で、今年度は82%に上昇した。 生活習慣病予防教室終了後の感想文で「生活改善への意思や意欲について」記述した人が87%であった。 12月の期末個別面談日に親子一緒に受ける血液検査結果指導会を行う。市の保健師や栄養士と事前打ち合わせを行い、血液検査の結果の他にも指導に必要な資料や展示物を準備する。	B：学校保健委員会で、生活習慣の改善に関する意識が高まる。PTA三役や保健部員が学校保健委員会に参加し肯定的な評価をした。終了後参加者から参加しない生徒や保護者への広報活動が重要になる。 A：生活習慣病を理解させ、生活改善への意欲をもたせた。血液検査の希望をとる前に、開催することによって、生徒が自分の体や健康状態に関心をもち、主体的に血液検査を受ける気持ちが高まった。 A：保護者のアンケートから、「生活習慣の個別指導を受けて良かった」と答えた人が98%であった。食習慣や早寝・早起きなど生活リズムや運動についても個別の指導を受けた。

【考察】

昨年度の当校の学校評価やランドデザインの評価では、朝食摂取や運動についての結果は90%以上と良いが、早寝・早起きとメディアのコントロールについては70%以下という低い結果であった。また、例年生活習慣アンケートを実施する5月には比較的良好な結果となるが、2学期から生徒の生活習慣が崩れていく傾向がある。

今年度は、ランドデザインの実現のための体プロジェクトの組織で取り組む活動の中心として、生徒の「早寝・早起き」の生活習慣の改善に取り組んだ。その結果、前期の学校評価の生徒の「早寝・早起き」の項目の数値は、74%であったが、後期には78%に上昇した。

●教育活動の成果と工夫

昨年度に引き続いて「生活習慣チャレンジ週間」を実施した。今年度は、学習指導部と連携してカードを作成し、生活習慣を改善して学習時間も増やすという目的で行った。1・2週目は家庭学習の時間を毎日記録させ、最終日に自分の目指す理想の生活時間（平日用と休日用）を帯グラフに記入させて目標を設定させた。3週目を「生活習慣チャレンジ週間」として設定し、睡眠時間を確保しつつメディアを上手にコントロールするなどして、早寝・早起きできるように生活改善させることを目指した。カードに実際の自分の生活を継続して記録させ、特に睡眠時間・学習時間・メディアの時間の実態をつかませ、問題点を焦点化させることができた。

昨年度の反省から、カードの提出率を100%とするため、カードの記入を学級毎に朝学活や終学活で一斉に行うことにした。

さらに、今年度工夫したことは、保健委員会生徒からの働きかけである。保健委員会の2学期のイベント的活動として、カードの集配を分担して行くとともに、別の「振り返りカード」を持たせ、朝学活や終学活でのカードの記入時の学級生徒の様子を記録させた。また、保健委員生徒自らが学級生徒の模範となって生活改善に取り組むという自覚を持たせるために、その日の自分自身の生活評価と意識や気持ち・感想を記録させた。これらのカードを集約して保健委員長が毎日、昼の放送で発表し生徒の生活改善への意識を高める事ができた。

また、保健便りでこのチャレンジ週間の目的や方法を保護者に周知し、カードの保護者のコメント記入も予告しておいた。これらによって保護者の意識も高まり、コメントから生徒の家庭での様子もさらに把握する事ができた。

これらの結果からチャレンジカードの自己評価で「生活習慣を改善できた」と「まあまあ生活改善できた」と答えた生徒は87%で、「改善できなかった」と答えた生徒よりも有意に多かった。(P=0.00, 片側検定)

●運営活動の成果と工夫

学校保健委員会では、生活習慣アンケートの結果を受けて学年ごとに生徒と保護者がグループワークを行い、対策を考えた。学校保健委員会に参加した生徒と保護者の感想文では、「生活改善や今後の広報活動への意思や意欲について」記述した人が、74%であった。(生徒：81%、保護者58%) (数見氏提唱の「わかり方の4段階」の4) 学校保健委員会に参加することによって「生活改善や今後の広報活動への意思や意欲について」意識が高まった人が高まらなかった人よりも有意に多かった。(P=0.00, 両側検定)

また2年生では、血液検査をする前に「生活習慣病予防教室」を開催した。地域の保健師を講師に迎え、生活習慣の大切さと血液検査の結果と生活習慣の関連について理解させるようにした。その結果、血液検査の受診率は昨年度72%で、今年度は82%に増えた。生徒が自分の体や健康状態に関心を持ち、主体的に血液検査を受ける気持ちが高まった。さらに、生活習慣病予防教室終了後の感想文で「生活改善への意思や意欲について」記述した人が87%であった。(数見氏提唱の「わかり方の4段階」の4) 生活習慣病予防教室によって、生活改善への意思や意欲が高まった人が高まらなかった人よりも有意に多かった。(P=0.00, 両側検定)

さらに期末個別面談日に、「親子一緒に受ける血液検査結果指導会」を行い、市の保健師や栄養士から食習慣や早寝・早起きなど生活リズムや運動についても個別の指導を受けた。食生活改善推進委員の方からも展示物の説明を受けることができた。関係者で事前打ち合わせを行い、血液検査の結果の他にも指導に必要な資料や展示物を準備するのは大変であるが、保護者に好評であった。保護者アンケートから、「生活習慣の個別指導を受けて大変良かった、まあまあ良かった、良かった」と答えた人が98%であった。血液検査結果指導会に参加して、「参加して良かった」と思った人が「参加して良かったと思わなかった」人よりも有意に多かった。(P=0.00, 片側検定)

これらの養護教諭がコーディネーターとして進めた組織的活動では、その期間や活動の直後は生徒や保護者の意識が高まり生活改善につながる事がわかった。

【今後の課題】

生活改善への意識が高まっても、活動と活動のはざまには意識が低下してしまうという課題がある。生徒や保護者の意識の高まりが、すぐに行動化や変容した行動の定着化につながるというわけではない。生徒の塾や習い事による夜型の生活環境や多様なメディア環境などの影響があり、また生徒の発達段階の特徴や思春期の心理面の要素も影響すると考える。今後は、さらに細かい分析と先行研究からの研修が必要である。

平成22年度 保健室経営の重点活動表

中等教育学校
生徒数 476人

教育目標	Be Glocal! 地域に立脚しつつ地球規模で活躍できる人材の育成
------	------------------------------------

学校保健目標
心身ともに健康で、学習・生活意欲に満ち、主体的に健康で安全な生活ができる生徒の育成
<p style="text-align: center;">重点目標</p> 中・高6年間を見通した健康教育活動の実践により、健康の自己管理能力を高め、生活習慣の改善を図り、心身の健康度の高い生徒を育てる。

生徒の主な健康課題
<ul style="list-style-type: none"> ・創立6年目で今年度初めて卒業生が出ることになり、地域や保護者の勉学に対する期待が大きく、それが心の負担になっている生徒が多い。 ・保健室来室状況や欠席状況、健康チェックの結果から、悩みやストレスを抱えている生徒が多く、心の健康に関する指導の充実が課題である。 ・家庭学習や趣味の活動で就寝時刻が遅くなりがちであり、睡眠不足が心身の不安定につながっている。

保健室経営重点目標	具体的方策	評価							
		自己評価				他者評価			
		よくできた	ほぼできた	あまりできなかった	全くできなかった	なぜそうなったのか 今後に向けて等	だれから	方法	意見・助言等
不適応生徒や心の問題を抱える生徒が改善の方向に向かう	A) 共感的対応に心がけ、生徒が安心して相談できるように保健室の環境を整える。	1	②	3	4	保健室に対して「癒される」「ずっと保健室にいたい」等の肯定的な意見が多く聞かれた。しかし一方では来室する生徒が後を絶たず処理しきれない状況もあった。	生徒	聞ア キン 取ケ リト	プライバシーに関わることやあまり他の人に聞かれたくない話をするときの相談スペースが必要。
	B) 毎月心の健康チェックを行い、生徒の健康の自己管理に役立てるとともに、心の問題の早期発見や、継続的な観察に役立てる。	①	2	3	4	計画通りに実施でき心の問題の早期発見や指導に役立てることができた。健康の自己管理の意味でも効果があった。	生徒	聞き 取り	健康チェックを通して自己を振り返り改善に向けた動機付けができた。来年も継続したい。
	C) 「心の健康」の単元の授業やストレスマネジメントに関する授業に積極的に関わる。	1	②	3	4	ストレス対処に関する講話講演会の企画運営、保健の授業への参画など、積極的に関わることができ、生徒の理解が深まった。	生担 徒任	振聞 りき 返取 りり	心の健康を守っていくために、具体的にどのような習慣が必要なのか焦点化して集団指導に活かしていく。
	D) 月ごとの欠席や保健室来室状況を職員に提示し、生徒の実態や課題について共通理解を図り、情報の共有化を図る。	①	2	3	4	学期や年間の資料よりも短いスパンの月ごとの資料提示は、職員が生徒の実態を知り共通理解を図る上で効果があったという意見が多かった。	保学 健年 部主 職任 員	聞ア キン 取ケ リト	生徒の情報が集まる保健室の特性を活かして、今後も対応を含めた情報提供を続けていくことが必要である。
	E) 問題の解決に向けて、定期あるいは臨時に連絡会を開き、支援の方向性を共有して対応できるようにする。	1	②	3	4	分掌（保健環境部）部会の時間に連絡会を行った。説明をするだけで時間がかかり今後の対応や分担を方向づけるまでいかないことが多かった。	保 健 部 職 員	聞 き 取 り	不適応生徒や心に問題を持つ生徒が後をたたない。不登校対策委員会が機能していくよう改善を図る。
	F) 個に合わせた適切な対応に努め、受診指導や医療機関への紹介を、カウンセラーや学校医と連携して行う。	①	2	3	4	一人で抱えこまないように連携を大切にされた相談活動を行ってきた。カウンセラーからはコンサルテーションを受けるなどよく連携がとれた。	カ 学 ウ 級 ン 担 セ 任 ラ	聞 き 取 り	相談数が多く、また問題が複雑である。さらに関係者関係機関との連携を深めていく必要がある。

本校の保健室経営では、「健康相談活動」がとても重要な位置を占め、相談件数も多く、その内容も複雑になってきている。生徒が自分自身の心の健康を守っていくために、今年度は、**不適応生徒や心の問題を抱える生徒が改善の方向に向かう**ことを保健室経営の重点目標として具体的方策を立てて取り組んできた。

その中で特に力を入れて行ったのが、具体的方策のB) 毎月心の健康チェックを行い、生徒の健康の自己管理に役立てるとともに心の問題の早期発見や継続的な観察に役立てる、という項目である。

心の健康チェックは右のように年間6回行った。→

- | | |
|---|-------------|
| ① | 5月病チェック |
| ② | 心の健康チェック1回目 |
| ③ | ストレスチェック1回目 |
| ④ | 心の健康チェック2回目 |
| ⑤ | ストレスチェック2回目 |
| ⑥ | 心の健康チェック3回目 |

心の健康チェックがはたして重点目標達成のために効果があったのかどうか、検証を行った。

1 対象：全校生徒

2 方法：第1回目の心の健康チェック表の合計点数と第3回目の合計点数を比較する。

比較した結果を以下のように分類する。

※健康チェック表は100満点

1回目も3回目も90点以上、 もしくは1回目より3回目の点数が8点以上上がっている。	A
1回目も3回目も75点以上90点未満で増減幅が7点以内。	B
1回目も3回目も75点未満、 もしくは1回目より3回目の点数が8点以上下がっている。	C

3 結果：

(1) 判定別割合

(人)

	A	B	C	計
前期課程	111 (47.6%)	93 (39.9%)	29 (12.5%)	233
後期課程	64 (30.8%)	96 (46.1%)	48 (23.1%)	208
全校	175 (39.7%)	189 (42.9%)	77 (17.4%)	441

(2) χ^2 検定

- ・前期課程では、A判定だった生徒がC判定だった生徒より有意に多くなった。(p=0.0000 片側検定)
- ・後期課程では、A判定だった生徒がC判定だった生徒よりもやや多く有意傾向があった。(p=0.078 片側検定)
- ・全校では、A判定だった生徒がC判定だった生徒より有意に多くなった。(p=0.0000 片側検定)

4 考察：

心の健康チェックは燕中等独自の形式であるが、点数の他に記述欄もあり、総合的に生徒の精神状態を詳しく知ることができた。心配な生徒について、担任に情報提供し教育相談につなげ、心の問題の早期発見・早期対応に効果があったと感じている。

また、記述の内容では「自分を振り返るいい機会になった。」「自分の状態がわかって良かった。」「自分の気をつけなければいけないことがわかった。」「毎回コメントをもらって嬉しかった。」など肯定的な感想が多かった。

しかし、全校生徒分を養護教諭一人で点検しコメントを入れていくのは大変な作業である。

時間がかかっても今後継続してそれを行っていく効果があるかどうか、 χ^2 検定を行った結果、前期課程では、心の健康チェックが重点目標達成のために効果がある活動だった。後期課程では、前期課程の結果ほどではないが、若干の効果が得られた。

原因として、5～6年生は目前に迫ってくる大学入試への不安、勉強のストレスを訴える生徒が多く、ストレス対処の講座を受けても、平常心で乗り越えていくことは難しい現実があった。

今年度の反省をふまえて、来年度は、前期課程は心の健康チェックを継続し、後期課程は焦点化した効果的な指導に力をいれて取り組んでいきたいと考えている。